

九州観光の現地レポート

▼観光資源が豊富な福岡県

九州観光の玄関口である福岡県は、観光というよりもビジネス都市としての印象が強いが、県内には豊富な観光資源が存在する。それこそ数え上げれば切りがないほどで、ハード的な資源としては複合商業施設のキャナルシティ博多や、門司港レトロ地区、スペースワールドなどの都市型観光施設が代表格。これに大宰府政庁跡や鴻臚館遺跡（古代中央政権の迎賓館跡）など古代からの遺跡も多く、博多祇園山笠や小倉祇園太鼓などの芸能文化資源も豊富だ。観光の3大要素の一つである“食べる”ことでは、博多・久留米ラーメンをはじめ、ウナギのセイロ蒸しなど福岡県ならではの食文化があり、多様な観光ニーズに対応している。

その福岡県観光は、大きく分けて『福岡エリア』と『北九州エリア』、それに『筑後エリア』と『筑豊エリア』の4つに分けられる。最近では、九州新幹線の全線開通を機に新し



北九州市内にあるスペースワールド



今年も盛大に行われた博多祇園山笠

い4エリアも設定した。九州新幹線の停車駅ごとに『博多駅エリア』『久留米駅エリア』『筑後船小屋駅エリア』『新大牟田駅エリア』があり、それぞれ個性のある観光が楽しめる。博多駅エリアでは人気の観光スポットが楽しめるほか、グルメやショッピングが充実。久留米駅エリアでは伝統工芸や温泉、B級グルメなどがあり、筑後船小屋駅エリアは豊かな自然と風情あふれる景色が魅力となっている。また、新大牟田駅エリアは、近代化産業遺産が観光スポットの目玉で、最近注目を集め出した産業観光の一翼を担っている。

こうした豊富な観光資源を持つ福岡県では、国内観光客と訪日観光客の二本立てで誘致施策を展開。国内向けでは、関西圏や首都圏など大都市圏などから多くの観光客を呼び込もうと、各地で観光PRを展開してきた。特に、観光客の増加につながると期待された九州新幹線の開業前には、長期間の観光キャンペーンを実施、一日でも一時間でも長く福岡県内に留めようと取り組んできている。

一方、訪日観光客向けには香港や上海、バンコク、サンフランシスコ、フランクフルトの5か所に開設している福岡県海外事務所をフル活用して、PR活動を常時展開。特に福岡を訪れる観光客が急増している中国人観光客をターゲットにした活動では、昨年5月から約半年間にわたって開催された上海万博に、九州観光推進機構との共同出展によるステージ上でのイベントや、観光パネルの展示などを行った。

県国際経済観光課によると、福岡県の観光振興について①新しい観光資源の創造②地域連携協力による集客力の強化③マスメディアとの連携④修学旅行誘致の実施⑤産業観光の推進⑥グローバル時代のコンベンション戦略⑦観光ボランティアガイドの育成・活用⑧インターネットを活用したサービスの拡充・活用―を重点に実施してきたと説明。

例えば、新しい観光資源の創造では大川家具で有名な大川市で、観光産業と木工産業を合体させた“大川もてなし観光地づくり事業”を展開、将来的に産業観光ボランティアにつながる観光ボランティアガイドを育成した。また、八女市で“Hotかれんな街づくり事業”を実施して、新しい観光資源を掘り起こしている。八女市には大和政権の九州制圧にまつわる“磐井の君の墳墓”や、江戸時代の城下町など各時代の地域資源が豊富にあることから、伝統的街並みと歴史資源、伝統的工芸品、自然を複合的に活用して観光ルートとして開発した。



大宰府天満宮は観光名所の定番

修学旅行誘致の施策では、大阪や東京などの国内大都市圏で説明会を開催したほか、首都圏の中学校と高校を対象にした教職員向けの視察研修を実施。一方で中部、関西、中国地方などの地域を主なターゲットに、九州新幹線を活用した筑後地域の修学旅行を提案、新定番として打ち出している。産業観光でも福岡の先端成長産業である自動車やロボット、伝統産業、炭鉱遺産などの多様な産業集積を観光に活用。2006年に設立した産業観光推進協議会には、加盟する89施設が観光客を受け入れている。

▼クルーズ客船の寄港に期待

福岡県では、本年度も引き続き九州新幹線の全線開通に伴う観光推進事業を積極的に進めていくという。特に開通後の現在では、利用客や乗降客をいかに獲得するかが、地域間での競争となっているため、関西以西を主要なターゲットに観光キャンペーンを展開して、

より集客増を図ることにしている。海外観光客向けには、主に博多港に入港するクルーズ客船の誘致を促進していく方針だ。

番外編の①で前述したとおり、福岡県内の海港からの入国外国人数は増加基調にあり、近年では海外の観光地に立ち寄りながら博多港に入港するクルーズ客船がその増加に一役買っている。これまでは距離的に近い韓国・釜山港を往復する高速船が中心だったが、経済発展が目覚ましい中国本土からの団体観光客を乗せたクルーズ客船の寄港が急増。博多港に上陸した後、福岡市内やその周辺を観光するケースが目立っている。この中国人団体ツアーの観光ルートを福岡県内各地へ拡大させ、さらにはリピーターとなって福岡観光を定着させることを重点施策に据えた。そのためには、博多港を東アジアにおけるクルーズ客船の起点港とすることが重要とし、その実現を目指していくことにしている。

福岡県がクルーズ客船の誘致を促進するには、大きな理由がある。クルーズ客船には



天下の名城である熊本城には、年間170万人以上の観光客が訪れている

1船で1,500-2,000人の団体ツアー客が乗り込んでいるため、1回の寄港で大勢の観光客を獲得できるからだ。韓国や中国からのクルーズ客船に限らず米国や欧州などからも大型クルーズ船が立ち寄る。県国際経済観光課では、「より多くの客船が博多港に入港するように、船会社やツアーの企画会社などへの売り込みが不可欠」だとし、積極的に営業を行っていくと言う。

▼観光立県を宣言した熊本県

熊本県では2008年6月、観光立県を宣言し同年12月には「ようこそくまもと観光立県条例」を制定。今、県民総参加で『記憶に残る観光地』を目指して取り組んでいる。同県は、古代から現代に受け継いできた貴重な歴史遺産をはじめ、阿蘇や天草などの雄大な自然と風土、そして豊富な湧水に温泉と観光資源には事欠かない。観光立県宣言では、県内各地



福岡市内にあるロボスクエア



エコツーリズムが満喫できる阿蘇の草原

で守り継がれてきた固有の優れた資源を『回廊』として結び付け、地域経済の活性化と就業機会の拡大を図っていくことにしている。

その熊本県の延べ宿泊者数は、国土交通省の宿泊旅行統計調査によると、2010年には約537万人弱だった。全国順位にすると10位の福岡県には届かないものの、21位にランクされ、九州では2番目に延べ宿泊者数が多い県だ。中でも外国人宿泊者数がここ数年増加基調にあり全体の約6%を占め、全国で14番目にランクされる。外国人の宿泊者数では韓国人が最も多く、7割近くを占めているという。多くの韓国人が福岡県を経由して来県し、熊本県内の温泉やゴルフを楽しみながら郷土料理を味わっている。

その熊本県内の観光は、大きく分けると6つのエリアに分けられる。県庁所在地の熊本市周辺をはじめとして阿蘇や天草などで、それぞれのエリアには魅力的な観光資源が散在。熊本市内には天下の名城、熊本城が最大の観光スポットで、水前寺公園まで市電でも巡れ

るお手軽な観光コースとなっている。その熊本城は石垣がきれいに残り、2008年には本丸御殿が復元したことから、毎年170万人以上の観光客が訪れている。外国人観光客にとっても観光コースから外せない定番名所で、築城者の加藤清正との関係から韓国人観光客は敬遠するのではないかと心配も全くないという。

熊本市内との2大観光ポイントを形成する阿蘇エリアは、大自然の眺望が売り物で春は草原、秋にはススキが一面に広がり春夏秋冬を通してエコツーリズムが満喫できる。湧水にも恵まれており、白川水源や産山水源などが日本名水百選に最多の8か所が選ばれているほか、阿蘇の伏流水が熊本市内まで流れていることから、約73万人の熊本市民の飲料水は、この地下水で賄われている。熊本市民は、常にミネラルウォーターが飲めるというわけだ。この熊本・阿蘇地域だけで、県内宿泊者数全体の約6割を占めるが、加えて天草エリアなどへの日帰り客や宿泊客が増加基調にあるという。天草が注目を集めているのは、国内でも珍しくイルカ・ウォッチングが楽しめるからで、船を出せば必ずと言っていいほどイルカに会えると人気を呼んでいる。

▼宿泊客をターゲットに集客

こうした魅力ある観光資源を活用して現在、「ようこそくまもと観光立県推進計画」(2008-2011年度)を実施しているが、観光客誘致

について、数値目標を最終年度となる本年度末までに、延べ宿泊客数を750万人に、延べ外国人宿泊客数を55万人に設定している。750万人の目標は、直近の2007年（平成19年）に691万人という実績値から8.5%の増加を見込んだ数値で、同県観光課では「新幹線の開業効果などを勘案すれば達成は見込める」としている。また、延べ外国人宿泊者については、2007年の40万人を基に4年間で38%の増加を目指す。

延べ宿泊客数の目標達成に大きく期待する新幹線の全線開通では、九州新幹線建設促進期成会が開通前に調べた地域間交流人口で、日帰り圏（片道3時間以内）での交流人口が開通前の約1,474万人に対して、開通後にはその1.53倍となる約2,250万人に増加すると予測。同様に、外国人宿泊客数も実績のある韓国と、経済成長著しい中国を2大マーケットととらえ、香港やシンガポールからの観光客を誘致することで達成を目指すことにしている。その原動力と期待しているのが、1999年（平成11年）に発足した『外国人観光客誘致連絡協議会』の存在で、同県の観光政策を展開する上で、貴重な財産になっているという。

とは言っても、目標をクリアするのは容易ではない。旅行のスタイルが夫婦や家族といった少人数単位に変化していることや、旅の目的が健康や癒し、あるいは食など多様化してきている現在、その旅行形態にいかに対応していくかが課題で、行政だけでなく企業や



最近注目を集めている天草のイルカ・ウォッチング

県民すべての協力が必要だ。その課題を解決すべく、同県では観光立県宣言以降、県民を巻き込んだ取り組みが実を上げてきており、変容する旅行動向にも対策を講じてきている。その代表的な取り組みが観光関係者だけでなく、子どもからお年寄りまで参加しているボランティア活動。“おもてなし大作戦”と名付けた県民総参加の活動には、県から一団体当たり年間30万円を上限に活動費が助成され、花壇を造って観光客を迎えるなど、地域ぐるみで工夫を凝らした“おもてなしの心”を示す活動を展開している。

こうした県民総参加の地道な観光客誘致活動をベースに、観光客の増加に大きな期待を寄せているのが新幹線の全線開通効果だ。全線の開業で熊本—大阪間が最短で2時間59分で結ばれるため、開通前には関西から中国地方にかけて、熊本の良さをアピールするパンフレット類などを置いてPR活動を先行展開。近畿・北陸・山陰・中国方面からの観光客誘致を図るため、JR西日本と初めてタイアッ

プキャンペーンを行い、受け入れ態勢を整えてきた。その効果が全線開通以後に表面化してくるわけだが、今後も来県客のために利便性の高いサービスを図っていくことにしている。

例えば、熊本県内入りした観光客に、二次アクセスの問題を解消するため、県とバス会社が連携し、県内の各観光地を結ぶバスや観光地を周遊するバスなどを旅行商品化し運行。さらに、熊本県内だけでなく熊本—長崎、熊本—大分といった観光をしながら他県にアクセスするバスも運行、バス移動の利便性を向上させている。その一方で、レンタカー利用者へのサービスも充実させ、熊本県内でレンタカーを手配すると、料金が4割引となるほか、九州のどこの県に乗り捨てても、乗る捨て料金が無料となるキャンペーンを今年9月まで展開している。こうした新しい試みによる観光客誘致対策で、本年度の延べ宿泊客数の目標を達成させようとしている。

今年3月の東日本大震災の発生以後、国内観光は東北地方だけに止まらず、全国的に落ち込んでいるのが実情だ。海外からの訪日観光客も減少し、観光庁発表の『訪日外客数・出国日本人数』統計（暫定値）によると、4月は前年同月比62.5%減の29万5,800人、5月は同50.4%減の35万8,000人となっている。減少幅が徐々に縮まってはいるものの、依然として半減状態で、回復するまでにはまだ時間がかかりそうだ。

こうした状況下で、九州観光にとって救い



熊本県内には温泉地が散在している

なのが開業したばかりの九州新幹線で、ほぼ順調な滑り出しとなっている。JR九州の発表によると3月12日から4月11日までの1カ月間で、博多—熊本間の利用客が前年同期の在来線特急利用に比べ、30%増の約74万6,000人で、熊本—鹿児島中央間でも同55%増の約43万人だったという。熊本県に限らず、九州にとって新たな交通網ができたことによって、観光客を呼び込める手段が増えたわけで、それだけ誘致活動がしやすくなる。

今後、東日本大震災で被害を受けた地域の復興も本格化し、それと同時に国内の経済活動は活発化するだろう。現代人にとって観光は余暇を楽しむ上で必要な一行動であり、日常生活から解放されて楽しむ旅行は欠かせない存在だ。より多くの観光客を誘致するためには、魅力的な観光資源をいかにアピールし、“何度も訪れたい”というリピーターをいかに確保するかが、今後の観光振興を左右することになる。(了)